



最優秀賞

ともに築く

農村ユートピア

熊本県阿蘇郡白水村・両併地区青壮年部

吉良 清一 39



熊本県阿蘇郡白水村の農家に生まれ、地元の両併小、白水中を経て同県立第二高に入学、大阪府立大農業工学科に進み、2年間の会社員生活の後、家業の農家を継ぐ。過疎に悩む中山間地の故郷を案じ、両併青壮年部の仲間と「おいしい、あんせん、しんせん、すてき」の「オアシス農業」を基本に、村おこし運動に取り組む。無農業米作りから始め、農家民泊運動「奥阿蘇てんぐ隊」や高齢者を手助けする農作業受託組織の結成、海外との交流などユニークな運動をグループで展開している。

おらがムラを

なんとかしよう

白水村は熊本県南阿蘇の中心部に位置し、阿蘇山と南外輪山に囲まれたカルデラ内にあり、人口約四千六百人、世帯数千二百四十九戸、稲作中心の純農村です。

私がここで農業を始めたのは一九八一（昭和五十六）年、二十五歳の時でした。代々農家ではあったものの、大学卒業後、近隣の会社に勤務、サラリーマン生活を送っていたのですが、通勤を重ねるうちに農業に憧れる日がやってきたのです。とは言っても、「職業としての農業」だけに魅かれたのではなく、むしろ農業を核とした地域社会に生活している

ことに刺激を受けたためです。それに加え、結婚という人生の転機も影響したのは、隠さざるべき事実なのですが……。というのも、妻、いいえ共同経営者としてのパートナーに自らの将来像、職業像を語るうちに、現実に対する矛盾が芽生えたのです。これこそ私が抱いていた農業に対する夢であり、自分の住むムラに対する夢であったのです。

最良のパートナーを得た私は、農業経営の自立化に励みました。父母の経験と、農協・普及所のアドバイスをもとに、コメ農業のみからメロンを導入、さらに冬季の換金作物としてウドも取り入れました。数年で周囲からも注目される経営が確立でき、自分なりに満足いく成果だと自負していたのですが、以

前からの矛盾が大きく膨らんだのです。周りを見渡せばどうでしょう。五十五年に七千五百九十七人だった人口が、今では五千人を切り、毎年村を出ていく家が後を絶ちません。

倒れかけた家屋敷、荒れ果てた山あいの水田、草ぼうぼうの原野、頭を殴られる思いでした。学校は統廃合の危機、病院がつぶれ、商店はなくなる。近所の酒屋が出て行かれたのは、私にとって重大なことでした。子供の生まれる数より、お年寄りの亡くなる数が多い。子供たちも成人と同時に村を出る。わが家の経営は良くなったのに、なぜだ！

こうした疑問を、地区の若者の集会でよく語ったものでした。幾度となく語るうちに、私と同じ考えを持った悩める青年がいるでは